

## 意味はなぜ現象学の問題になるのか ——フッサールの『論理学研究』再訪——

植村 玄輝

### はじめに

「ドイツ観念論の系譜において、意味 *sens* の概念を現象学と同じくらい使用し、濫用した思想は、ほとんど存在しない」(Benoist 1997, p. 21)。それを濫用と見なすべきかについては論争の余地がおおいにあるとはいえ、意味が現象学において中心的な役割を担う類出概念だという指摘に話を限れば、ブノワのこの見解に異論を差し挟む余地はほとんどないだろう<sup>1</sup>。だが、現象学の伝統に属するとされる哲学者・現象学者たち、たとえばフッサール、ハイデガー、メルロ＝ポンティ、レヴィナスが「意味」ということでそれぞれ何を考えているのかということは、(ひょっとすると本人たちにとってさえ)自明ではない。したがって、現象学者がこぞって「意味」をキーワードにしているという事実から即座に引き出されがちな見解、つまり、意味についての(一枚岩ではないにしても)一連のまとまった問題が現象学者に共有されているという見解は、魅力的な研究プログラムを示唆するかもしれない反面、無条件に信頼できるものではない。

こうした事情に直面した際にわれわれが取りうる対応の一つは、現象学の伝統において意味が問題として浮上してきた最初の場面に立ち戻り、それがなぜ問題になるのかを問い直すというものである。これを本稿の課題としよう。さて、ブレンターノ学派という偉大な先駆者たちの存在を忘れてはならないとはいえ、フッサールが現象学の伝統の始点に位置づけられることは明らかである。そして、「意味」が重要な用語として最初に登場したフッサールの著作が、1900/01年に公刊された『論理学研究』(以下、『論研』)初版であることも、同じくらい明白であるように思われる。したがってわれわれは、『論研』初版における意味の問題に焦点を絞ろう<sup>2</sup>。

より具体的には、われわれは以下のような手順で話を進める。われわれはまず、『論研』における意味の問題の前景化を適切な文脈に位置づけるために、フッサールが同書の公刊直前(1898/99年)におこなった講義を取り上げる(第一節)。というのも、この講義における形而上学についての見解を手がかりにすることによって、現象学の形而上学的中立性という『論研』のフッサールの主張がよりよく理解されるのであり、同書における意味の問題の前景化は、この形而上学的中立性テーゼと密接に関係しているのである(第二節)。次に、以上の点を踏まえ、形而上学的中立性を標榜する『論研』の現象学がより詳しくはどのような立場であるかについて考察する(第三節)。こうした議論を踏まえて、われわれは最後に上述した問題に立ち戻り、簡単に所見を述べたい(終わりに)。

### 第一節 初期フッサールにおける形而上学の構想と認識論の要請

『論研』が置かれている文脈を理解するために、「認識論と、形而上学の要点」と題された1898/99年冬学期講義を検討することからはじめよう。この講義においてわれわれの目を引くのは、フッサールが一貫して形而上学について肯定的な態度を取っているという点である。これは奇妙なことではないだろうか。というのも、同時期に原稿が仕上がりがつあった『論研』では、現象学が形而上学の問題とは無縁であり、そのかぎりでは形而上学的に中立的であることが明言されるのである<sup>3</sup>。だが、この奇妙さは見かけ上のものに過ぎない。われわれは次節の冒頭でこのことを明らかにする。本節では、そのための準備作業として、問題の講義の内容を確認しよう。

同時代における形而上学への論難、とりわけ自然科学者たちによる忌避を踏まえつつ、フッサールは、(正しく展開された)形而上学が自然科学にとっても有意義な側面を持つとのべている(cf. Mat. III, pp. 232-3)。フッサールによれば、自然科学の経験科学としての課題は、「現象の世界に、考えうる限り完全な仕方で寄り添うこと *si ch orientieren*、つまり、〈それを通じてわれわれが現象の未来の経過を見積り、過去の経過を再構成することができるような、精密法則)を発見すること」(Mat. III, p. 251)によって尽くされる。したがって、われわれが経験的根拠のみにもとづいて示しうるのはある理論の経験的十全性に過ぎず、

現実のリアル(時空的・因果的)な世界に何がどう存在するのかについての知識——フッサールはこれを、「形而上学的認識」としばしば呼ぶ——は、経験科学としての自然科学を足がかりにするだけでは獲得できないというのである<sup>4</sup>。

以上のかぎりで、フッサールが構想する形而上学は、経験科学に還元されない哲学的学科である。だが、経験科学の成果に適切な解釈を与えることによって達成されるのだから、それは経験科学から全面的に独立しているわけではない。経験科学から独立し、そのかぎりでアプリアリな考察によって進展させられるのは、この解釈のための基本的な枠組みに限られる<sup>5</sup>。形而上学のこうしたアプリアリな部門に属する問題の例としてフッサールが挙げているのは、実体や付帯者といった存在論的カテゴリについての理論、実体の統一性・通時的同一性・運動(アキレスと亀のパラドクス)といった問題である(cf. Mat. III, pp. 247-51)。

だが、形而上学についての以上のような見解を打ち出す一方で、フッサールは認識論的な問題を、すべての学問の一般的前提をなし、形而上学の基盤を提供するものと見なしている。形而上学がリアルな現実についての問題であり、もっぱら自然科学に関わるのに対して、「すべての知ることは、真理に関わっている。厳密なみでの知ることは、真理の認識である」(Mat. III, p. 252)。したがって、学問一般にとって本質的なのは、形而上学の問題ではなく、真理および真理の把握としての認識という問題である。

## 第二節 現象学の形而上学的中立性と意味の問題の前景化 : 統一的著作としての『論研』

1898/99年の講義がたどり着いた真理の問題の優先性という見解を踏まえれば、形而上学に対するフッサールの肯定的態度と『論研』の形而上学的中立性テーゼのあいだにあるように見える齟齬は、見かけ上のものに過ぎないということが分かる。

『論研』第一巻第五節(XVIII, pp. 26-7)において、フッサールはおよそ以下のようなことを述べている。リアルな外界が存在し、それは数学的に扱うことができ、その中の出来事はすべて因果的な法則に支配されている、といった形而

学上の諸前提の内実を確定し、吟味することによって、学問は形而上学的に基礎づけられる。だが、こうした形而上学的な基礎づけは、学問一般についての理論、つまり学問論にとって重要であるわけではない。というのも、学問一般について、それがレアルな実在(フッサールの言葉では、「レアルな現実 *reale Wirklichkeit*」)に関わることは、本質的ではないのである。別の言い方をすれば、レアルな外界に関する形而上学的諸前提の内実に左右されないといういみで、学問論は形而上学的に中立的である。

では、学問論は何を基盤とすればいいのか。続く第六節において、フッサールはこの問いに回答を与えている。「知ることのうちで、われわれは真理を所有している」(XVIII, p. 28)のだから、学問一般にとって本質的なのは真理である。よって、真理の(形式的)諸条件を探究する論理学こそ、学問論の基盤に据えられるべき学科である。こうした一連の主張は、1898/99年の講義の見解と基本線において一致しているばかりか、この見解をさらに押し進めたものである。だが、ここまでで示されたのは、学問論の形而上学的中立性に過ぎない。現象学の形而上学的中立性がなぜ要請されるのかを理解するためには、『論研』をもう少し読み進める必要がある。

『論研』第一巻の残りの大部分は、論理学を心理学の一部門とみなす立場(心理主義)に対する徹底的な批判に費やされている。この批判は、心理主義の論駁という消極的な役割だけではなく、読者を正しい論理学理解へと導いていくという積極的な役割も果たしている。論理学の探究対象を心的なものと同視することから導かれる不条理な帰結の数々を指摘することによって、命題というイデア的(抽象的・無時間的)対象の形式が論理学の対象であり、真(偽)であるという性質の担い手であることが示されるのである<sup>6</sup>。

だが、命題の承認は、フッサールに新たな課題をもたらす。認識という学問的な知識の獲得をつうじてわれわれは真理を所有している、というフッサールを導いていた主張が、このとき謎めいたものになってしまうのである。認識は、われわれが行うものであるかぎり、時間の中で生成消滅する(心的)出来事である。その一方で、認識によってわれわれが手にする真理は、無時間的な命題である。認識と真理は、その基本的な特徴を異にしているのだから、両者が何らかのしかたで関係することを自明な出発点とするわけにはいかない。

『論研』における意味概念の前景化は、こうした問題意識を念頭に置いて理解されなければならない。同書における意味概念の導入は、命題を言表文の意味とみなすという文脈でなされている。フッサールの考えでは、命題と言表文の意味の同一視は、イデアの対象としての命題という発想に含まれる謎めいた要素をいくらか減じさせる効果を持っている。意味はそれを理解する者のその都度の体験に還元されない客観性を持ち、言表文の意味を理解するという出来事はきわめてありふれたものなのだから、命題を言表文の意味と同一視してやれば、それがイデア的な存在性格を持つということは、それほど奇妙なことではないというのである<sup>7</sup>。

もちろん、この同一視そのものは、イデア的な命題とわれわれの体験の関係を明らかにするという課題の出発点の設定でしかない。その出発点とは、命題やそれが持つ真ないし偽という性質がわれわれに与えられる体験には、言表文の意味を把握することが本質的な要素として含まれているということである<sup>8</sup>。こうした体験の典型は、言表文を使って何かを真と見なすこと、判断作用 *Urteilen* である。『論研』第二巻で展開される学問論・論理学の現象学的基礎づけとは、判断作用という言語能力の行使を本質的に含んだ体験の分析を通じて、命題概念の内実を明らかにすることに他ならない<sup>9</sup>。命題を個別の体験と同一視してしまう心理主義的な誤解は、現象学的分析によってはじめて克服される。

ところで、学問論は形而上学的に中立的であるという性格を持っているのだから、学問論の基礎に関わる現象学的な分析も、学問論の形而上学的中立性を維持するものでなければならない。現象学的分析の形而上学的中立性は、こうして要請される。現象学的分析がリアルな外界に関する特定の形而上学的主張を含意するならば、現象学は学問論の基礎であることができない。

形而上学的中立性の要請は、フッサールの現象学的分析に対して大きな制限を課すことになる。判断体験の分析による概念の明確化という『論研』第二巻を導く発想は、ブレンターノの記述的心理学のプログラムからのきわめて大きな影響化にある<sup>10</sup>。よく知られているように、ブレンターノは記述的心理学の分析対象を志向性によって境界画定し、志向性を「(志向的)対象への関係」として理解していた。だがこうした理解は、体験の現象学的分析のうちに体験の志向的対象の分析を呼び込んでしまうのではないか。すると、現象学的分析は、

リアルな外界についての形而上学的な含意を持つことにはならないか。

この問題に関して、フッサールは『論研』第二巻の緒論第七節で次のように述べている。

思考作用が場合によって超越的客観に向けられているか、あるいは非実在的な客観や不可能な客観に向けられているということは、[現象学の課題]にとって何の妨げにもならない。というのも、このような対象的方向、つまり、現象学的に実現されていない客観を表象・思念することは、とうぜんこの当該体験の記述的特徴なのである。したがって、このような思念の意味は、純粋に体験そのものをもとにして解明・確定されるべきであり、それ以外のやり方ではおそらくそのようなことは不可能だろう。(XIX/1, p. 25)

ここでフッサールはあきらかに、志向性を対象への関係として理解する布伦ターノの立場に同調している。すると、現象学は形而上学を避けられないのではないか。こうした疑問に答えるかのように、フッサールは上の引用の直後にこう続けている。

われわれ固有の自我とは区別される「心的」・「物的」なレアリテートを想定する権利についての問い、また、このレアリテートの本質とは何か、このレアリテートはどのような法則に従うのか、物理学者が関わる原子や分子はそれに属するかどうか等々の問いは、認識論から徹頭徹尾区別されている。「外界」の存在と本性に関わる問いは、形而上学的な問いである。(XIX/1, pp. 25-6)

つまり、フッサールは志向性を対象への関係として理解することを認めつつも、志向性の現象学的分析が形而上学的中立性の要請に忠実であると主張するのである。

こうした主張は、『論研』第二巻で展開される志向性理論によって支えられている<sup>11</sup>。『論研』のフッサールによれば、ある体験の志向性つまり対象への関係は、現象学的観点からは、その体験が特定の意味を内容として持つことに過

ぎず、それ以上でもそれ以下でもない。そして、ある体験がある意味を内容として持つことは、その体験がその意味を例化していることに等しい。つまり、意味と個別の体験の関係は、赤であるという性質(「スペチエス」と個別の赤いもの)の関係と同じく、例化関係であるというのである(cf. XIX/1, pp. 105-6)。したがって、志向的体験についての現象学的分析を表現するカノニカルな言明には、当該の体験とそれが例化する意味についての表現しか登場せず、こうした言明から志向的対象の存在や内実についての形而上学的言明は一切帰結しない。『論研』の志向性理論は、体験と意味の関係にのみ注目することによって、形而上学的中立性を守るのである。

こうした立場は、真理の把握についての理論でも維持されている。判断に確証を与える作用である直観について、それが真性の知覚であるか、想像であるか、あるいは錯覚や幻覚であるかといったことは、現象学的な分析にとっては無関係であり問題にされないというのである(cf. XIX/1, p. 358; XIX/2, p. 672)<sup>12</sup>。直観によって充実された判断を下すという体験についても、現象学的観点からは、それが何らかの意味を例化しているということへの言及によって、形而上学的中立性を保ったまま分析され尽くされなければならないのである<sup>13</sup>。

### 第三節 『論研』の現象学はどのようなものなのか

以上の作業によって、われわれは、『論研』のもっとも大きな枠組みを概観した。こうした枠組みを手がかりに『論研』の細部を検討することは、きわめて重要で興味深い試みである。だが、紙幅も尽きつつある。われわれは、ここでは『論研』の現象学についての全体的な描像をもう少し明確化することで満足しよう。

フッサールは『論研』第二研究への緒論において、意味のイデア性についての第一研究の成果を振り返りつつ、意味を心的存在者に還元する心理主義に對抗する自らの立場を「イデア主義 Idealismus」と呼び、こう補足している。

当然だが、ここでイデア主義という言い方によって考えられているのは、形而上学的学説ではまったくなく、イデア的なものを客観的な認識の可能

性の条件として承認し、それを心理学的に誤解しないような認識論のかたち Form のことである。(XIX/1, p. 112)

ここから読み取れるのは、レアルな存在者の場合と鮮烈な対比をなす、イデア的存在者としての意味の露骨な承認である。もちろん、こうした主張は『論研』第一巻においてすでに繰り返し述べられたものであり、そのかぎりで驚くべきものではないかもしれない。だが、ここには第一巻ではあまり強調されていない論点が含まれている。それは、現象学的分析における意味の役割に関するものである。

形而上学的中立性の要請によって、フッサールは、現象学的分析のなかでレアルな世界を持ち出すことを禁じられる。すると、イデア的存在者・スペチエスとしての意味を認めないかぎり、フッサールの手元に残されるのは、時間の中で生成消滅するさまざまな体験だけである。だが、現象学的分析がそうした体験だけに関わるのだとしたら、それによってわれわれの認識が客観的であることを論証することは、絶望的な試みである。ここから強く動機づけられるのは、スペチエスとしての意味の存在は、『論研』の現象学の前提でなければならないということである<sup>14</sup>。

こうした前提は、『論研』第二巻全体の構成に不整合をもたらすように見えるかもしれない。というのも、フッサールは、スペチエスについての体験(「普遍性意識」)を分析する第二研究を、第一研究における意味のイデア性という主張を補うものとして位置づけているのである。だが、こうした懸念は杞憂である。それが厳密にはどのような体験であるかについては探究の余地があるとはいえ、意味は、それについての体験をわれわれがすでに手にしているような対象である。意味を理解し、場合によってはそれについて語ることは、われわれの日常の一部である。そのかぎりで、意味はまったく未知の対象というわけではないのだから、こうした対象の存在を仮定することはただちに不当であると見なされるわけではない。さらに、意味はレアルな対象ではないのだから、その存在を仮定することは、形而上学的中立性の要請にも抵触しない<sup>15</sup>。第二研究における現象学的分析は、スペチエス説としての意味の存在を前提しつつ、われわれがそれを把握する体験のあり方に説明を与えようとしているのである<sup>16</sup>。

まとめよう。『論研』の現象学は、分析の対象となるさまざまな志向的体験<sup>17</sup>だけでなく、そうした体験に例化されるスペチエスとしての意味の存在も前提としている。『論研』の現象学に要求される無前提性とは、レアルな世界に関する形而上学的中立性に関わるものでしかないのである。そして、意味のイデア的存在に関する前提は、一方で認識の客観性を守りつつも、形而上学的な中立性の要請を守るために、重要な役割を果たしている<sup>18</sup>。

### 終わりに

以上でその概略を見てきた『論研』のイデア主義的な現象学は、維持することが困難な主張を帰結する。その一例をごく簡単に見てみよう。『論研』のフッサールにしたがえば、この世界に関して真であったり偽であったりする無数の経験的命題は、すべてスペチエスとして存在し、場合によってはわれわれの体験に例化される。このように莫大な数の命題の存在を認めることは、それ自体で信じがたい主張だろう<sup>19</sup>。

もちろん、この信じがたさを飲み込むだけのメリットが存在するならば、フッサールの説にも分がないわけではない。本当に困難な問題は、別のところにある。一般的に言って、経験的命題は、言表文のタイプよりもはるかにきめ細かく個別化されなければならない。というのも、われわれの言語は文脈依存表現に満ちているのだから、そうした言語に属する文のタイプと命題のあいだに一对一の対応関係が成り立つわけではない。ところで、『論研』のフッサールにしたがえば、命題は判断といったわれわれの体験に例化されるスペチエスである。すると、現象学的分析は、われわれの体験を、無数に存在する経験的命題のどれがその体験に例化されているのかを説明できるくらいきめ細かく区別できなければならない。こうした区別を可能にする一つの方法は、個別の体験が置かれている文脈を志向性理論の中に導入することである。だが、形而上学的中立性の要請によって言及が禁じられているレアルな世界(の一部)を持ち出すこと以外に、文脈を志向性理論の中に導入することが果たしてできるのだろうか<sup>20</sup>。

こうした作業が困難を極めることは、予想に難くない。実際、こうした事情を背景に、フッサールは意味をスペチエスと見なす立場を放棄するに至る。そ

して、スペチエス説の放棄と密接に関連して、フッサールは現象学の形而上学的中立性という要請を退け、超越論的観念論による形而上学の可能性の擁護という路線に転じるのである。こうした事情について、われわれはすでに別の機会に論じている<sup>21</sup>。したがってここでは、冒頭の問題設定に則して、いささか大局的な観点からわれわれの考察を振り返ることで本稿を閉じよう。

『論研』のフッサールにとって、意味という概念は、真理の問題と密接な関係にあり、(少なくとも言葉の広いいみでの)言語哲学的な考察を中核にして説明されるべきものであった。もちろん、こうした見解がフッサールの思想の発展を通じてどれくらい維持されたかどうかについては、われわれは慎重にならなければならない。というのも、『イデーニ I』のフッサール、つまり超越論的観念論的な立場に転じた後のフッサールは、意味概念の拡張の必要性を説き (cf. III/1, p. 121n; V, p. 89)、さらには、拡張された意味概念に一定の優位をあたえさえするのである<sup>22</sup>。しかし、この優位がどのようなものであろうとも、意味概念の「拡張」は、それが拡張である以上、『論研』で論じられていたような、言語の意味という概念を前提にしないと理解不可能である。たとえフッサールが『論研』の見解を維持していないにしても、それが意味するのは、同書の問題設定の放棄ではなく、転倒(言語哲学的考察と知覚の現象学の主従関係の逆転)に過ぎない。

以上のかぎりで、『論研』以降の展開がどう解釈されようとも、言語哲学的な考察は、フッサール現象学にとって重要なものであり続ける。この点を軽視してはならない。というのも、こうした事情があるからこそ、フッサールにおける体系的な意味の理論の欠如を指摘するダメットやトゥーゲントハットのフッサール批判が批判たりうるのである<sup>23</sup>。「フッサールは(すぐれて現代的ないみで)体系的な言語哲学者か」という問いが成り立つ余地がなければ、彼らの批判はせいぜいのところ無い物ねだりでしかない。

さて、現象学の伝統における主要な哲学者のうち、その人が(すぐれて現代的ないみで)体系的な言語哲学者かという問いが成り立つ余地のある仕事を残しているのは、ほとんどフッサール一人であるといっていいたいだろう<sup>24</sup>。意味を中核にして現象学を一つのまとまりと見なすためには、フッサール以降の現象学者たちによる「意味の哲学」のそれぞれは、フッサールのそれに比肩するだ

けの体系性を備え、比較考察が可能なものでなければならない。そうでなければ、現象学者たちに共通していると言えるのは、意味という(ひとまとまりの)概念を重視したという事実ではなく、「意味」という語を皆好んで使ったという事実でしかない。こうした主張にポイントがないことはあきらかだろう。「意味はなぜ現象学の問題になるのか」という問いは、一息に片をつけられるような代物ではない。これにあっさりとは片付けて先に進むことは、意味概念を鍵にして現象学とは何かということの問題にしたいならば、けっして許されてはならないのである<sup>25</sup>。

## 註

- <sup>1</sup> なお、引用文からは分りにくい(原文も分りにくい)、ブノワはここで現象学をドイツ観念論の系譜に属すると見なしているわけではない。
- <sup>2</sup> とくに断りのないかぎり、われわれは *Husserliana* 版 (XVIII, XIX/1-2) にもとづいて第一版を引用・参照する。
- <sup>3</sup> 『論研』の形而上学的中立性テーゼについては本稿の次節を、『論研』を實在論的な著作とみなす従来の解釈については、Zahavi(1992)による批判をそれぞれ参照のこと。
- <sup>4</sup> 本文直前の引用箇所が続けて、フッサールはこう述べている。「だが、[経験科学の]課題が完全に解決されたとわれわれが考えたとしても、現実に関する諸々の問題のすべてが解決されるわけではあきらかかない」(Mat. III, p. 251)。
- <sup>5</sup> こうした考えは、1906/7年の講義においてより明快に述べられている(cf. XXIV, pp. 95-102)。
- <sup>6</sup> 「真ないし偽という論理的な術語は、その本来の意味にしたがえば、もっぱら言表文の意味といういみでの命題 *Sätze* に関わっている」(XVIII, p. 180n)。「推論形式を形成する帰結 *Folge* という関係は、判断体験の経験的心理学的な連なりではなく、可能な言表の意味、つまり諸々の命題のイデア的關係である」(XIX/1, p. 99)。これらの発想は、「命題自体 *Sätze an sich*」についてのボルツァーノの見解に由来している。「誰かがそれを表現しているかいないのか、あるいは、誰かがそれを思考しているかいないか、ということをおも問うことができるような場合に命題ということでは考えられているのが、まさしく私が『命題自体』と呼ぶものである」(Bolzano 1837, vol. I, § 19, p. 77)。ボルツァーノの命題概念については、Textor(1996, ch. 1)を、論理学に関するフッサールへの影響については、Textor(2000)をそれぞれ参照のこと。
- <sup>7</sup> こうした見解——1903年に公開されたパラージ書評において、これはより鮮明に打ち出されることになる(cf. XXII, p. 156)——は、フッサールとフレーゲのあいだに興味深い対比を生み出すように思われる。文の意味(フレーゲの語法にしたがうなら「意義 *Sinn*」)としての命題を心的でも物的でもない「第三の領分」に属する存在者と見なす点に関して、フッサールとフレーゲは大筋で一致した見解を持っている。だが、フレーゲのこうした見解について Dummett(1991)が述べていることを、そのままフッサールに当てはめて説明することはできない。ダメットによれば、命題(「思想」)の客観性を

守るためにそれを第三の領分に位置づけた結果、フレーゲは意義 Sinn の把握を不可思議なプロセスと見なさざるを得なくなってしまった。それとは対照的に、命題ないし意味のイデア性を示すフッサールの議論は、われわれが文の意味を把握していることを議論の出発地点としているのである。もちろん言うまでもなく、フッサールの議論がこうした方針を持つことと、問題の議論が成功していることは別である。だが、この議論のより詳細な定式化や(必要に応じた)敷衍は、残念ながら本稿の課題を超えている。

- <sup>8</sup> したがって、現象学的分析が差し向けられるべき体験は、「言語とともに現象学的統一を形成している」(XIX/1, p. 8)。『論研』の現象学は、われわれの言語的な実践そのものの解明を射程に収めているのであって、言語の意味を、われわれの言語使用の背面にある何かから説明しようとしていたわけではない。この点については、植村(2007b)も参照のこと。『論研』の現象学についてのこうした描像に関して、われわれはブノワによる一連の仕事に多くを負っている。ここでは、ブノワのフッサール解釈の基本方針が示される印象的な一節を引用しておこう。「[...]存在しているのはまさに、意味の事実、言語において・言語によって『意味をなすこと』(アングロサクソンならば『making sense』)と言うだろう」という事実、つまり、発話するという事実である。もし現象学が、現象と事実のもとに踏みとどまる思考、要するに記述的な思考という自身の企図に忠実であるならば、この純然たる事実以外の何から、意味という題材へと向かっていけるというのだろうか」(Benoist 1997, p. 22)。
- <sup>9</sup> こうした事情を踏まえ、命題から命題の形式的構造に関わる論理法則に関心を移しつつ敷衍すると、『論研』で目論まれていた「論理学の現象学的基礎づけ」によって回答されるべき問いは、「論理法則が命題についての法則である一方で、われわれの思考の法則でもあるというのはどういうことなのか」というものになる。したがってここでは、個別の事例からの心理的抽象作用によって論理法則そのものの妥当性を現象学的に解明するなどということは、まったく問題にならない。そのような大仰なプログラムをフッサールの中に読み込んでしまう誤解はたしかに根強く存在し、そうした誤解に関してフッサール自身に責任がないわけではないのだが、本稿でこれらの問題に立ち入ることはできない。
- <sup>10</sup> 植村(2007b, pp. 110-1)および Chrudzimski(2001, pp. 92-3)を参照。
- <sup>11</sup> 『論研』の志向性理論の詳細については、Chrudzimski(2001, pp. 210-7)を参照。この理論と意味(つまり命題)をスペチエスと見なす立場の関係については、植村(2007a, pp. 172-5)を参照。
- <sup>12</sup> この点については、Zahavi(1992, pp. 116-7)も参照のこと。
- <sup>13</sup> 充実された判断と空虚な判断を区別するために、フッサールは「知覚における意味的なもの」・「充実する意味」を導入し、それを直観作用に例化されるスペチエスと見なしている(cf. XIX/1, pp. 56-7)。したがって、ある対象を直観することとは、その直観作用が特定の充実する意味を例化していることとして分析されるのである。こうして直観にまで拡張された意味概念には、第五研究において「作用質料」という名称が与えられることになる(cf. XIX/1, pp. 425-6, 433-5)。ここで注意しなければならないのは、『論研』の現象学における意味概念の拡張は、言語哲学的考察の延長線上でなされているという点である。充実する意味は、ある判断作用を充実する意味でしかなく、当該の判断作用と関連する言表文の意味に言及せずにそれを特徴づけることはできない。この点に関しては、Benoist(2008, Lecture 1)を参照。
- <sup>14</sup> こうした解釈への傍証として、われわれは1903年のパラージ書評を挙げることができ

る。この書評の中でフッサールは、命題自体は「存在 Existenz」を持たないと述べたボルツァーノの不明瞭さを批判し、命題のスペチエス説がこうした問題を解消したことが『論研』の独自性の一つであると述べている (cf. XXII, p. 156)。ただし、フッサールのボルツァーノ批判が果たして正統なものであるかどうかについては、検討の余地がある。

- <sup>15</sup> 『論研』第一版のフッサールには、自然的態度の一般定立の遮断という発想がないということに、われわれは注意しなければならない。『論研』のフッサールが現象学に要求していたのは、あらゆる超越的対象の妥当の停止ではなく、レアルな存在者についての形而上学的中立性である。
- <sup>16</sup> したがって、『論研』の志向性理論の特徴を根拠にして、フッサールにイデア的対象の存在についての中立性を帰属させる Farber (1962/2006, p. 203) の解釈には問題がある。もちろん、スペチエスについての体験の分析においても、フッサールは志向的対象を現象学に持ち込むことを拒否している。だがこれは、志向性理論の斉一性によって要請されているのであって、存在論的な考慮の結果ではない。
- <sup>17</sup> 『論研』の現象学が分析する志向的体験がどのような存在論的身分を持つかということについては、Benoist (1997, chs. 7-8) が詳細な考察を行っている。しかし残念ながら、こうした問題を検討するだけの余裕は、本稿には残されていない。
- <sup>18</sup> すると、自然的態度全般に関する無前提性を現象学に要求し、意味をスペチエスと見なすことを拒否する (後述参照) 『イデーニ I』のフッサールは、認識の客観性の問題を正当に扱えるのだろうか。こうした疑問はもつともなものである。『イデーニ I』のフッサールが意味を意識に依存させていること (cf. III/1, pp. 120-1) は、フッサールにおける意味の問題の意味が完全に変換してしまったことを示唆するかもしれない。だが、こうした点に関して、われわれは慎重にならなければならない。というのも、『イデーニ I』のフッサールがそれに意味を依存させる意識とは、われわれの経験的意識のどれとも存在論的に区別される「純粋意識」であり、この純粋意識は、ある解釈 (cf. 植村 2009b) のもとでは、論理空間とよく似た機能を果たすのである。
- <sup>19</sup> こうした批判は、Ingarden (1931/1974, ch. 5) によるものである。
- <sup>20</sup> 以上の点は、1911 年 3 月の草稿 (XXVI, Beilage XIX) の中で、フッサール自身によって指摘されている。もちろん、こうした指摘を行っていることは、フッサールが問題をきちんと扱えていることを保証しない。Benoist (2008, Lecture 3) が指摘するように、(フッサール) 現象学が文脈という本質的に外在的なものを扱うことができるのかということは、真剣に問われるべき問題である。この点に関しては、稿を改めて論じたい。
- <sup>21</sup> 植村 (2007a, 2009a, 2009b) を参照されたい。
- <sup>22</sup> 「表現の層は[...] 他すべての志向的なものに表現を付与するというを除けば、生産的ではない」 (III/1, p. 287)。
- <sup>23</sup> こうした批判が果たして妥当なものであるかということは、もちろん別の問題である。両者の批判に対するフッサール側からの応答として、富山 (2009a, 2009b) を参照のこと。
- <sup>24</sup> フッサールの他にこうした問いが成り立つ例外的な人物として、インガルデンを挙げることができる (cf. Chrudzimski 1999)。あるいは、言語行為論の先駆となる仕事を残したライナツハも、そうした人物の候補になりうるだろう。(ただし、早世した彼が残したテキストの中には、言語の意味に関する集中的な考察はほとんど見当たらない。) また、かなり微妙ではあるが、ハンス・リップスをこのリストに加えることができるかどうかということも、検討できるかもしれない。いずれにせよ、ここで名前が挙げられた哲学者たちが、ミュンヘン・ゲッチンゲン学派という現象学の傍流と見なされ軽

視されがちな潮流に属することは、注目に値する。

- <sup>25</sup> 本稿は、2008年度哲学若手研究者フォーラムにおける発表「意味はなぜ現象学の問題になるのか：フッサールの意味の理論再訪」をもとに、書き下ろされたものである。当日の発表に有益なコメントを下された方々に感謝する。なお本稿は、筆者が日本学術振興会特別研究員として文部科学省科学研究費（特別研究員奨励費）の交付を受けて行った研究成果の一部である。

## 文献

- Benoist, J. *Phénoménologie, sémantique, ontologie. Husserl et la tradition logique autrichienne*, Presses Universitaires de France, 1997.
- Benoist, J. “Phenomenological Approach to Meaning,” in *Interdisciplinary Logic*, vol. 1, M. Okada (ed.), Open Research Center for Logic and Formal Ontology, Keio University, pp. 1–80, 2008.
- Bolzano, B. *Wissenschaftslehre*, 4 vols., Seidel, 1837.
- Chrudzimski, A. “Are Meanings in the Head? Ingarden’s Theory of Meaning.” *Journal of British Society for Phenomenology* 30/3: pp. 306–26, 1999.
- Chrudzimski, A. *Intentionalitätstheorie beim frühen Brentano*, Kluwer, 2001.
- Dummett, M. “Frege’s Myth of the Third Realm,” reprinted in his *Frege and Other Philosophers*, Oxford University Press, 1991, pp. 249–62.
- Farber, M. *The Foundation of Phenomenology. Edmund Husserl and the Quest for a Rigorous Science of Philosophy*, Ontos, 1962/2006.
- Husserl, E. *Husserliana. Edmund Husserl Gesammelte Schriften*, Nijhoff/Kluwer/Springer, 1950ff. (ローマ数字で巻数を示し、分冊についてはアラビア数字で表記する。)
- Husserl, E. *Husserliana Materialien*, Kluwer/Springer, 2001ff. (Mat. と略記し、ローマ数字で巻数を示す。)
- Ingarden, R. *Das literarische Kunstwerk*, Max Niemeyer, 1931/1972.
- Textor, M. *Bolzano Propositionalismus*, Walter de Gruyter, 1996.
- Textor, M. “Bolzano et Husserl sur l’analyticité.” *Les études philosophiques* 4: pp. 435–54, 2000.
- Zahavi, D. “Constitution and Ontology. Some Remarks on Husserl’s Ontological Position in the *Logical Investigations*.” *Husserl Studies* 9: pp. 111–24, 1992.
- 植村玄輝「実的なものの現象学の限界：命題のスペチエス説はなぜ放棄されたのか」、『フッサール研究』、第4/5号、2007年a、170–80頁。
- 植村玄輝「内世界的な出来事としての作用：布伦ターノ、フッサール、ライナツハ」、『現象学年報』、第23号、2007年b、109–17頁。
- 植村玄輝「フッサールのノエマとインガルデンの純粋志向の対象：志向性理論から世界の存在をめぐる論争へ」、『フッサール研究』、第7号、2009年a、4–14頁。
- 植村玄輝「形而上学における志向性の方法：フッサールの『意味の理論講義』(1908)の意義」、『現象学年報』第25号に掲載予定、2009年b。
- 富山豊「フッサール初期志向性理論における『志向的对象』の位置」、『フッサール研究』、第7号、2009年a、61–72頁。
- 富山豊「初期フッサールにおける事態論」、『論集』第27号(東京大学文学部人文社会系研究科・文学部哲学研究室)に掲載予定、2009年b。

(う え む ら げ ん き / 慶 應 義 塾 大 学)